

委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 広島県呉市教育委員会

1 事業の趣旨・目的

地域で暮らすために必要な日本語を外国人住民の視点から見つめなおし、日本語活動の内容・方法を考えて実習し、その後の活動の基盤づくりをする。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
5月19日	呉市つばき会館	松岡 メイリ 伊藤美智代 大谷真由美 秦 和久	研修内容 業務計画、予算についての説明	業務計画書、実施要項に沿っての説明、研修
9月10日	〃	犬飼 康弘 松岡 メイリ 伊藤美智代 大谷真由美 秦 和久 住吉 邦之	研修前半の報告 後半の予定について	各回についての振り返り 受講しての気づきなど
12月27日	〃	犬飼 康弘 松岡 メイリ 伊藤美智代 大谷真由美 秦 和久 住吉 邦之	研修終了の報告・評価 今後の活動について	今後どう実践していくか 反省点

3 研修講座の内容について

- (1) 研修講座名 日本語活動から始める多文化共生のまちづくり
- (2) 研修の目標 地域で暮らすために必要な日本語を外国人住民の視点から見つめ直し、日本語活動の内容・方法を考えて実習し、その後の活動の基盤づくりをする。

- (3) 受講者の総数 85 人(延べ人数ではなく, 受講した人数を記載すること。)
 日本 56人 フィリピン 7人 ベトナム 6人 中国 6人 ペルー 3人
 ブラジル 3人 インドネシア 2人 マラウイ 1人 タイ 1人
- (4) 開催時間数(回数) 40 時間 (10回)
- (5) 参加対象者の要件 ボランティアとして, 地域で2年以上日本語活動を実践している市民
- (6) 受講者の募集方法 呉市広報誌 市政だより「くれ」
 呉ボランティア情報誌へ募集ちらしを折り込み, 募集
 呉市国際交流協会
 安浦日本語教室・日本語教室《呉》・文化振興課
 くれ市民協働センターとセンターのホームページ
- (7) 研修会場
 ア 講義 くれ市民協働センター・呉市広公民館
 イ 実習 呉市広公民館・呉市広図書館・JR 広駅, 新広駅・ジャスコ広店・呉市東消防署
- (8) 使用した教材・リソース
- (9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
5月30日 10:00～ 15:00	「多文化共生のまちづくり」を日本語教室から	多文化共生リソースセンター 代表理事 土井 佳彦	25名
6月13日 10:00～ 15:00	外国人住民の視点からみる「私たちの社会」	ひまわり21 ワールド・キッズ・ネットワーク 伊藤 美智代	21名
6月27日 10:00～ 15:00	異文化間コミュニケーション能力を高める	広島市立大学 准教授 吉 沅洪	18名
7月25日 10:00～15:00 7月31日 17:00～21:00	「やさしい日本語」をマスターしよう!	ひろしま国際センター YMCA 広島日本語講師 吉本 由美	9名 29名
9月18～19日 10:00～15:00	共に行動してニーズをつかもう	ひろしま国際センター 日本語講師 犬飼 康弘	32名 9名

10月2日 13:00～17:00	緊急時に必要な日本語を伝える	多文化共生マネージャー 全国協議会 時 光 ひろしま国際センター 日本語講師 犬飼 康弘	11名
10月3日 10:00～15:00			9名
11月28日 10:00～15:00	分かったこと、 得たもの、そしてこれ から	ひまわり21 ワールド・ キッズ・ネットワーク 伊藤 美智代	21名

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

○日本という異国の地でさまざまな理由、問題、夢を持って暮らす外国人の現状から、世界が目指す“多文化共生”の意味・目的まで、短時間で大容量の情報を吸収できた有意義な研修だった。

○統計の資料を見たことで、呉における外国人住民の情報を幅広く複眼的に知ることができて、以前より理解が深まった。

○「サポートのない自立は孤立だよ」「不適応を経験して新たに成長した人間になる」「相手がやってみようと思うまで待つてあげる」という言葉が印象的でした。

○聞く技術をグループで演習しながら学びました。良い聞き手と話すとお話が楽しくたくさん話せるのを実感しました。自分の意見、感想を言わずに話を聞くのがなかなかできませんでした。日常会話に自己主張が多いのに気づかされ反省しました。

○犬飼先生がスロベキア語でしか話さず、日本語での説明を一言もされないのに、自分も含め出席者の皆が、何の違和感もなく、次々と行動を起こす事が不思議でした。後で思い出しましたが、先生の表情・ジェスチャー・写真等から、何を言おうとされているのかを連想し、一生懸命理解しようと自分自身努めていました。このことから、言葉が通じなくても、相手に伝えようとする熱意と笑顔があれば通じるのだと言う事が判りました。

○前日の活動で撮った写真や行動記録・参加者の気づきなどをもとに、図書館をテーマに考えました。どう行動するか、何がわからないか、どんな言葉や表現を知っておいたら目的を達成できるかを話し合いました。実際に図書館に行って確認しながら、会話例を中心に活動案を作ってみました。グループに加わっていた外国人スタッフの意見がとても参考になりました。実際に現場に行き観察すること、観察やプラン作りを学習者と一緒に取り組むことは、私たちに重要な気づきを与えてくれます。今回の研修の一連の流れを教室活動にとりいれて活動歴の長い学習者と取り組めば、ニーズに合った活動案ができそうです。

○災害に備えて外国人住民に何を伝えたいのか、研修を受けるまでは現実的ではない、災害ガイドブックに書いてある事をそのまま、読んで説明するような事しか想像できませんでした。日頃から外国人住民と接する事が多いのですが、災害について話し合ったのはこれが初めてでした。今回の研修では実際に外国人の方々から話を聞いたことによって、いくら相手の立場に立って考えてみたつもりでも、日本人の私では思いつかない話をたくさん聞くことが出来たのがとてもいい経験になりました。

② 実施主体からの研修内容結果評価

受講者は地域日本語活動を進めていく上で基本的に必要な要素を、時間をかけた丁寧な研修を受けることで、頭と心にしっかりと受け止めたようだった。研修で取り組んだ内容を応用し、自らの活動ですぐに実践した受講生が何人もいたということから、効果があったことがうかがえる。

講師の皆さんに研修の全体像をお伝えし、随時経過をお知らせした上で打ち合わせを重ねた。各講座の目的を明確にしながら進めたことで研修内容がより充実したと思われる。

各回とも講義とワークショップのバランスがよかったので、受講者は長時間の研修にも関わらず、集中が途切れず主体的に取り組むことができたようだ。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

日本語活動をするボランティアスタッフが、地域の外国人住民が何を望み、必要としているのかについて確認できるような講座や研修を実施し、他の事業を行っている団体等への広報や参加呼びかけをこれからも行っていく。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

講座の実施において、国際交流広場の「にほんごサロン」をはじめ市内外の日本語教室のボランティアスタッフ、ひろしま国際センターのスタッフ、地域住民等の参加や協力を得ることができた。

研修内容が人と人を結ぶことを大事にしていたこともあり、受講者同士の情報のやりとりが盛んになり、他の教室を見学したりイベントへの参加を誘いあったりするようになった。受講者それぞれの立場で協力しあい、今後さらに合同での事業を組んで実行できるように発展することを期待する。

日本語ボランティアのみならず、地域住民、行政職員、学習者等を巻き込む研修内容だったので、参加した関係者それぞれの立場でそれぞれの学びが生じたようだ。

② 研修後の人材活用

研修で得たこと、例えば日本語を教える際に、丁寧に教えようとするあまり言葉が多くなり、学習者にとってはかえって分かりづらくなっていた、説明は少なくともコミュニケーションはとれるのに、良かれと思ってやっていたことが思い込みで過ぎなかった等に気付き学んだことを踏まえ、これまでの活動を見直し、今後の活動に役立てていく。

地域日本語教室のボランティアスタッフ・学習者・自治会や女性会、BBS等の地域住民・警察署・行政職員といった様々な立場の方々が研修に参加した。日頃関わることの少ない住民が外国人住民とともにショッピングセンターや図書館等といった、生活に密着した場所に出かけた。実際に一緒に行動することで、文化の違いを知り、自国では食べることがないものやパッケージだけでは何かわからない食品が売られていたり、本を借りたくても利用方法の表示がなく分からないなど、多くの気付きや発見をしたことから、必要な情報とそうではない情報を分け、シンプルに伝えることの重要性、困難さを改めて考えなおし、活動に生かすとともに仲間に伝え、働きかけることが当研修の人材活用となっていく。

また、各団体・教室で中核となって活動している受講者が、生活者としての外国人住民が地域で孤立することなく生活をしていくための日本語活動や、多文化共生のためのまちづくりに必要な研修を企画運営し、主体的に学びの場をつくり出すことによって、ニーズに合った適切なサポートが可能となっていくと思われる。

(12) 今後の課題

研修のグループワークで提案されたプランを、埋もれさせずに生かしていくこと。

研修を継続していくための方策を考えること。

今回生まれた連携の芽を協働に発展させていくこと。